たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.27　平成5年3月31日

弥生時代の住居と方形周溝墓

多摩ニュータウンNo.939遺跡（町田市小山）

縄文誕生から　多摩ニュータウンの　遺跡と遺物へ

昨年、縄文時代草創期の遺物を中心に焦点を絞り込んだ展示としてデビューし、市民の方々や考古学研究者から好評をいただいていた常設展示「縄文誕生」がその使命を終え、新しい展示に交替しました。東京都の施設では唯一の考古系展示施設として多様な要求に応えてゆかなければならない空間の利用法の一つの試みとして考えられた展示でした。そのテーマに合うように講演会も企画し、展示された遺物の奥に潜む歴史について諸先生方に語っていただきました。いずれの講演会も盛況で市民の方々の興味、意識の高さを肌で感じ取ることができました。

さて、当センターの入館者の多くを占めるのは、小学生高学年であることは毎年不動です。課外授業の一環として学年単位で訪れ、映画「丘陵の中の歴史」を鑑賞した後、展示を見学し、遺跡庭園で復元住居を見ながらお弁当に舌鼓をうつのが一般的です。

今回の新しい展示は小学生を中心にできるだけ広く歴史の流れを感じて取ってもらいたいと考え企画したものです。今年の秋には多摩ニュータウン遺跡群の遺跡と遺物を中心とした展示会も別に企画しており、ますます、どのように展示を通して理解していただけるものなのか考えなければならなくなっています。御期待下さい。

（千野裕道）

遺跡だより㉝

弥生時代甕の出土状態

かつて、多摩ニュータウン地域には弥生時代の遺跡はないといわれてきました。弥生時代は米づくりが始められた時代ですが、多摩ニュータウン地域は細い尾根や狭い谷ばかりでその稲作を行うのに適した良い土地がないと考えられていたからです。今回はその常識を覆すような発見があったNo.939遺跡の紹介をします。

遺跡は町田市小山に所在し、昨年開業した京王線多摩境駅東側の細い馬の背状になった丘陵上にあたり、眼下には境川と町田市や相模原市の街が開ける相模原台地が広く見下ろせます。

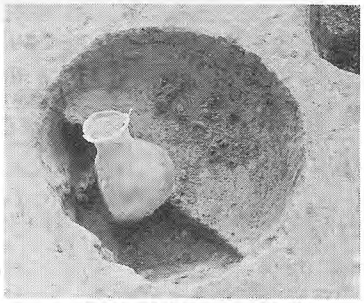
昨年・一昨年の調査によって、この地に今から二千年前の弥生時代の村が築かれていたことが明らかにされました。

村は8軒の住居跡と方形周溝墓と呼ばれる特別に作られたお墓1基などから構成されています。住居跡は一辺が5m程の方形状になるもの（2軒）と、それよりやや小振り（6軒）の2種類があり、尾根上に列をなすように構築されています。住居内には、わずかですが当時の人たちが使った壺や甕、石器が残されていました。

村のはずれには、幅1m、長さ6mほどの溝によって四辺を区切り、中央部分に埋葬施設をもつ方形周溝墓が築かれています。方形周溝墓はこれまでに多摩ニュータウン地域からすでに3基発見されていますが、今回のはその中でも最も古い多摩ニュータウン地域最古のものです。おそらくこのお墓には、この村で米づくりを始めた人々のなかでも長的な人が埋葬されていたと思われます。

また、方形周溝墓の溝内の土を全て水洗したところ、なんと炭化した米が50粒も検出されました。おそらく木製の容器のようなものに入れてお墓に供献したものだったのでしょう。もちろん多摩ニュータウン地域で弥生時代のお米が出土したのは初めてのことですが、この村で米づくりが行われていたことを示す重要な証拠です。米を作っていたんぼは丘陵を降りた境川の段丘面にあったと考えられます。近くには今でもたんぼがあったことを示す「田端」と呼ばれる地名も残っています。しかし、この時代のことですから、現在のように3食ご飯を食べるほど多くのお米はとれなかったはずです。お墓からお米が出たことは、その貴重性を物語っています。

方形周溝墓の近くには、径80cm程のたらい状の土壙が3基掘られていました。これもお墓の一種と思われますが、1基の土壙からは壺と炭化したトチノミが多数検出されています。同じお墓でも方形周溝墓からはお米、土壙からはトチノミといった違いがあり、それは村の人たちのなかに身分的な違いがあったことを示しているのかもしれません。

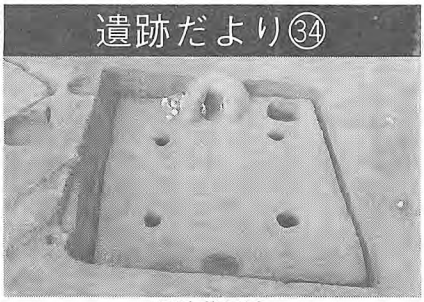


トチノミが発見された土壙

稲作を始めた人々が、新しい土地を求めて多摩ニュータウン地域にまではるばるやって来たのですが、それもこの地区が限界でその奥の丘陵内にまでは入ってこられなかったようです。そして、この地に住みついた弥生時代の人々は、その後継続的に住み続けることなく、また新たな土地を求めて移動していたようです。彼らは一体どこへいってしまったのでしょうか。再び多摩ニュータウン地域に人が住み始めるのはそれから二百年ほど後のことです。（小薬一夫）

尾根上、弥生時代住居跡

遺跡だより㉞



竪穴住居跡

今回は、町田市小山町に所在するNo.327・330遺跡を紹介します。遺跡は多摩川の支流である大栗川の上流部にあたり、多摩川と境川の分水嶺北側の緩斜面上に位置しています。現在調査中ですが、今のところ縄文から平安時代までの遺構と遺物を検出しています。遺構・遺物の中心は6世紀後半から7世紀前半（鬼高式期）の竪穴住居跡群で、多摩ニュータウン遺跡群の中でこの時期の集落跡としては最大規模のものです。ここではこの集落跡について紹介したいと思います。

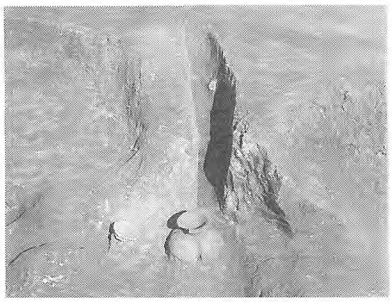
集落は、竪穴住居跡約50軒からなり、尾根上の約20軒、谷中の約30軒が検出されていますが互いに隣接しており、同一の集落として捉えることができます。住居跡の特徴は、やや歪んだものも見受けられるものの概ね正方形を呈し、4つ柱穴をもつ点や北面する壁面に白色粘土を用いて造り付けた竈（かまど）を有し、その横に貯蔵穴を、また反対側に入り口施設と思われる柱穴が見られる点です（写真上）。また、規模は大まかに見ると7.5m、5m、3mの3種類があり、このうち5mのものが大半を占めています。

遺物としては、土器類では、土師器の甕（こしき）、小形甕、甑（つき）、坏（はち）、高坏、鉢、手捏（てづく）ね、須恵器の坏（蓋・身）、横瓶が、また土製品では勾玉、管玉、丸玉、石製品として砥石、紡錘車などが出土しています。

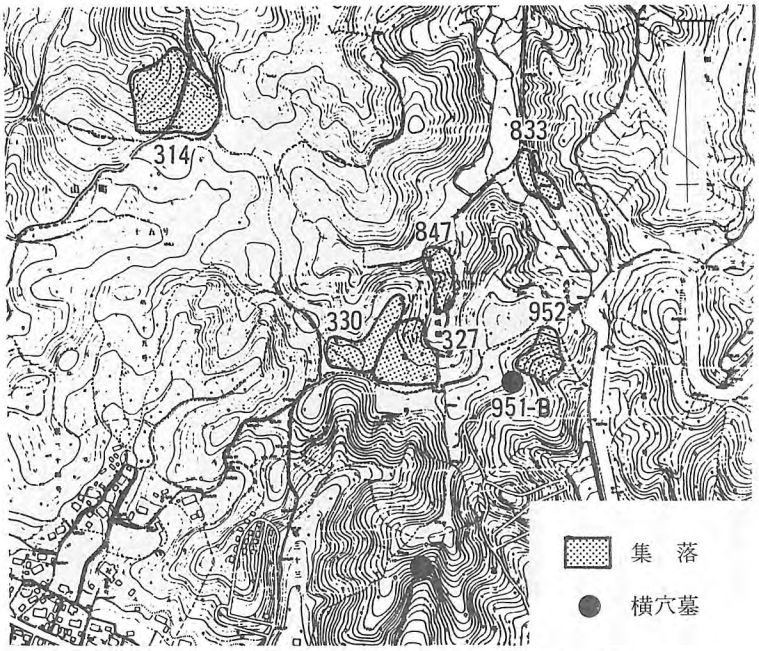
このうち23号住居跡の竈の中から、赤色塗彩を施した高坏、坩（かん）形の手捏ね（写真中）と共に土製の勾玉、管玉などの装身具（写真下）が出土しています。調査の結果、この竈から、出土した土器や土製品が二次的な焼成を受けていないことから、竈が使われなくなった際にこれらの遺物を供え、何らかの祭祀を行い、その後に埋められたと考えられます。これは、竈や住居を廃絶する際に行われた祭祀の一種なのかも知れません。

これらの住居跡は重複こそないものの互いに近接しており、50軒の住居が同時に存在していたものとは思われません。数軒ずつの住居群が建て直しながら、約100年間に渡って営まれた集落と考えることができるでしょう。この問題は、今後、出土した土器などの検討から詳しく見ていく必要があります。また、No.951－B遺跡など周辺から横穴墓も発見されており、集落と墓域の関連から当時の歴史像を復元していかなければならないと考えています。

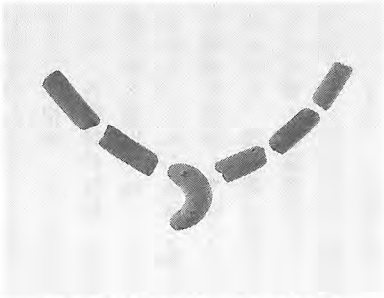
（澤田秀実）



23号住居跡カマド内　土器出土状態

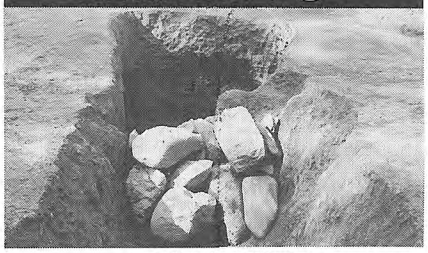


No.327・330遺跡周辺の6～7世紀の集落、横穴墓



23号住居跡カマド　出土装身具

遺跡だより㉟



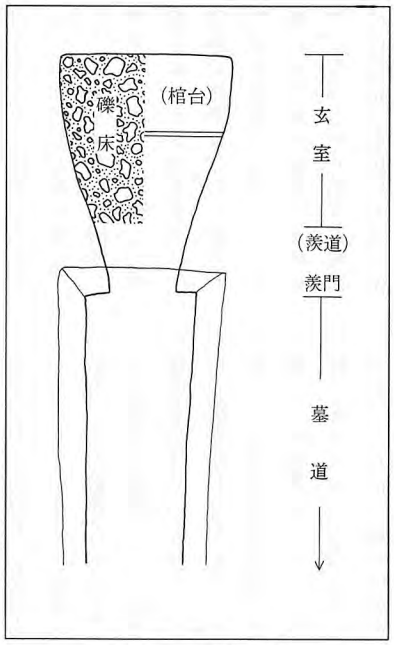
2号横穴墓の羨門部

町田市小山町のNo.951－B遺跡から発見された横穴墓群について紹介します。遺跡は境川に向かって延びる丘陵の谷の南斜面に位置し東側には浜街道が南北に走っています。

横穴墓とは、丘陵や台地の崖にトンネル状に穴を穿ち、そこへ人を埋葬するための墓で、古墳時代の後期に普遍化する墓制の一つです。一般的には群集してつくられる特徴を持っています。墓はおおむね墓道、羨門、玄室の各部からなり、墓室の入口に相当する羨門は、人頭大の礫や板石等を用いて塞がれています。

今回の調査では、二基の横穴墓が検出され、いずれも関東ローム層中に掘削されていました。1号墓は道路の造成工事中に発見されたため、墓室の前面はすでに削られた状況でしたが、内部は比較的良く保存されていました。墓道を含めた全長は約7m、玄室長2.5m、奥壁幅1.8mで、高さは奥で1.1mを測ります。天井部の断面は低いアーチ形で、玄室の形態は羽子板状を呈しています。玄室の床には拳大の礫が敷きつめられ、奥壁よりは一段高く造作されています。礫床の中央部からは、ほぼ一体分の人骨が集められた状態で検出されました。大部分はすでに粉状になっていましたが、下顎骨や大腿骨などは比較的よく残っていました。

1号墓の西、約7m程離れたところに2号墓が並んで検出されました。この横穴墓は墓道から確認でき、羨門部の閉塞石も完全な形で残されていました。全長は約6m、玄室長2.0mで奥壁幅は1.8mを測ります。玄室の形態は1号墓同様、羽子板状を呈していますが、規模は極めて小さいものです。また、天井は低平なカマボコ形で、その高さも90cm程と推定されます。不思議なことに、この横穴墓の玄室部には礫床がなく、そのかわりに木炭が約10cmの厚さで敷かれていました。

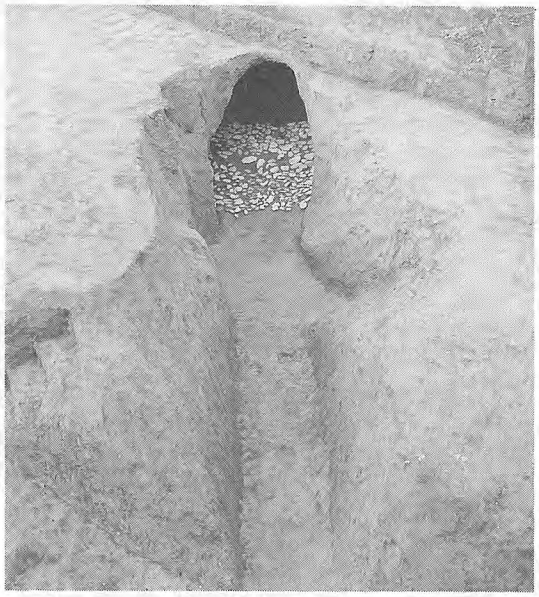


横穴墓の構造模式図

2号墓の墓道部からは、須恵器の長頸壺と土師器の坏の破片が少量出土しました。これらの土器はいずれも、八世紀前半代にみられる土器の特徴を有していることから、この横穴墓の時期も奈良時代の初め頃と考えられます。

境川の流域では、これまであまり横穴墓は確認されていませんでしたが、最近になって、相次いで周辺地域からも発見されてきました。とくに、小山町を中心とする地区には、未発見の横穴墓が多数存在すると思われます。

今後、この地域の横穴墓の様相をより明らかにしていかなければなりません。さらに、相原・小山地区からは、古墳時代後期の集落跡が多く検出されていることから、これら集落と墓域の関連を検討してゆく上においても、横穴墓は私たちにより多くの重要なヒントを与えてくれるものと期待しています。（松崎元樹）



1号横穴墓の全景

出土木器を遺すために

発掘調査が低地で行われるにつれ、土器や石器だけでなく、木器といわれる木でできた遺物の出土が多くなっています。これらは、水分が十分に存在しているところに埋っており、いわば木材などがちょうど大気から切り離されて水分でパックされた状態にあるわけです。そして木器は、今までの台地の調査では明らかにできなかった新たな歴史を提示してくれる大切な資料となります。ところがこれらには扱いにくい特徴があります。まず第一に土器や石器よりも脆いということがあげられます。さらに、十分な水分が含まれている場合には形が安定しているのですが、乾燥して水分が失われるにつれて変形がおこり、やがて崩壊へと向かいます。つまり考古学的な情報を失ってしまうわけです。このような出土木器は、木としてはすでに「ヌケガラ」の状態にあるといえましょう。それでは、どのようにすれば考古学資料としての価値を損ねずに有効に活用できるのでしょうか。

形状としては、土中に埋っていた状態と同じように常に十分な水分を与えておいてやれば、木器は変形しません。しかし、膨大な量の木器について「どこから出土した、どういうものなのか」をわかりやすくして水に浸けておくには広大な空間やそれなりの設備が必要になります。さらに、一定期間を経過すると水分が蒸発したり、腐敗したりします。このようなときには洗浄し水を交換することになります。といっても木器は文化財である以上扱う数が減ることはなく、膨大な水、管理の目、水替えの手間が、終わり無くいるわけです。加えてこうしている間に少なからず木器がダメージを受けることになるのです。このような木器とその管理者の両方にかかる大きな負担からなんとか解放できないものか、その対処として「木器の保存処理」というものがあるのです。ここでいう保存処理というのは、「考古学」よりむしろ『文化財保存科学』という分野の中で扱われます。それでは木器保存処理の例をあげてみましょう。

出土した木器に保存処理を施すことによって、水浸け状態から解放されるわけですが、その方法として今二つを簡単に紹介いたします。一つめは、木器の中にしみ込んでいる水分を、蝋(ろう)燭(そく)の蝋に似たポリエチレングリコールという物質に置換する方法です。これを行うには、ポリエチレングリコールを溶かした水の中に数カ月間木器を浸けておき、少しずつこれがしみ込んでいくのを待ちます。徐々に濃度を上げていき、最終的には百%すなわち完全に樹脂だけをしみ込ませて固めておくわけです。二つめは真空凍結乾燥法といい、インスタントコーヒーやカップ麺の中に入っている乾燥野菜を作る方法を応用したものであります。機械の中に木器を入れて減圧し凍っている水分を一気に水蒸気にして取り去ってしまいます。この方法は、木に墨痕が遺っている木簡などに施されることが多く、木の色合と墨の黒さのコントラストを比較的良好に保つことができます。

木器は密閉容器に収納

しかし、このような方法には長所と共に短所があり、各研究機関では日々長所を伸ばし短所を改善する努力が払われています。このことは裏を返せば、完全万能な保存処理法というのはありえないことを示唆しているのであり、我々は出土した資料をどのように活用するのか、そのためにはどのように対処すればより良いのか、遺物を前にして常にそれを考えておかなければなりません。保存処理という作業を通して、文化財としての遺物を永く保存できるようにトリートメントするわけですが、それと同時に考古学資料としての情報が失われることのないようにきちんと保存していかなければならないのです。

（石川隆司・カット中村亜理）

発掘中
洗浄
台帳登録
仮保管 ＊事前調査 ＊現状記録（実測・写真） ＊脱色処理
PEG 20% 水溶液浸漬
PEG 40% 水溶液浸漬
PEG 60% 水溶液浸漬
PEG 80% 水溶液浸漬
PEG100% 水溶液浸漬
接合・復元
記録
保守・管理

＊＊＊木器処理の道のり＊＊＊

文化財講座〈23〉

縄文時代と人々 (11)

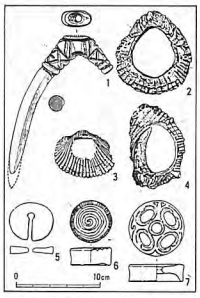
縄文人と装身具

数年前、奈良県の藤ノ木古墳で、多彩かつ豊富な副葬品が石棺内から発見されたことは、記憶に新しいところです。

冠、耳飾り、帯金具などの装身具は、金銅製のもので、被葬者は自分の社会的地位を象徴するためにこれらを着装していたと考えられます。

このような「装身具」、現代風にいえばアクセサリーに身をつつむことは古くから世界中で行われていることで、日本でも北海道の湯の里4遺跡からは、約1万4千年前の垂飾や玉類が発見されています。

縄文時代においても、髪飾り、耳飾り（5～7）、腕飾り（2～4）、腰飾り（1）、垂飾などの多種多様な装身具が発見されており、その材質も土・石・木・貝・骨・角・牙などバラエティーに富んでいます。

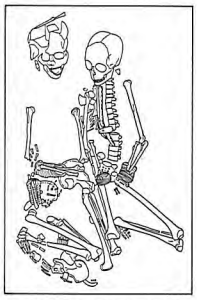


いろいろな装身具

これらの装身具は時期や地域によって流行があったようで、形態や材質に差異が認められます。

たとえば、耳飾りは前期から中期にかけて、玦状耳飾り（5）、中期は鼓状の形をした耳栓、後・晩期は滑車形耳飾り（6）や透かし彫り形耳飾り（7）が流行していたようです。

また、装身具の発見例はさほど多くはなく、福岡県山鹿貝塚で発見された埋葬人骨のように両腕にあわせて14点の貝輪、他にも大珠・叉状角器・サメの歯の耳飾りが一緒に葬られている例はむしろ例外といえるでしょう。装身具着装者について、時期・性別の統計を出している春成秀爾氏によると、全埋葬人骨のうち、着装しているのは10％にも満たないようです。


山鹿貝塚出土人骨

狩猟・採集・漁撈を主要な生業として、身分差のない生活を送っていたイメージが強い縄文人ですが、装身具の着装状況を見る限りでは、これを身につけられる人とそうでない人の間には社会的立場－出自の所在（どこのムラの出身か）・ムラの中での役割（たとえば、祭祀者や狩猟のリーダー）・通過儀礼経験の有無などーの違いがあった可能性があります。

現代ではファッションの一部と化しているアクセサリーも、縄文時代には自己の象徴として重要な意味を持っていたのかもしれません。

（西澤　明）

東京都遺跡調査・研究発表会における発表

2月14日(日)に葛飾区テクノプラザかつしかにおいて開催された会において、当センターから小薬一夫調査研究員による発表が行われました。多摩ニュータウンNo.939遺跡における縄文、弥生時代の住居跡、方形周溝墓などについてスライドを用いながら説明が行われました。（本紙2ページ参照）

遺跡展の準備 9月28日から8日間の開催予定

本年4月20日から11月7日にかけて202日間、立川市昭和記念公園を中心に開催される多摩東京移管百周年記念事業「TAMAらいふ21」に関連した催物として「多摩の遺跡展」の準備が東京都教育委員会と当センターの共催として進められています。立川駅にあります立川ルミネ9階ウィルホールで9月28日(火)から10月5日(火)にかけて8日間開催されます。遺跡や遺物について市民により広く理解してもらうためのものです。多摩地区における旧石器時代から中世にかけての歴史を遺跡、遺物からみてもらいます。現在その準備をすすめていますが、とりわけ、展示解説書に掲載する遺物の写真撮影にあたっては、多摩地区の各市町村教育委員、博物館、個人の方々から多大な協力をいただき、無事今年度の予定を終了することができました。

映画「遺跡発掘の記録」の製作すすむ

遺跡展と同様の事業として、遺跡の発掘調査を映像として市民に公開し、理解を広めるために、その製作がすすめられています。

発　行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1－14－2
☎ 0423-73-5296
平成5年3月31日